

へ放出されることをおそれたことによる。

- その後、中操の設備図書等により再検討した結果、胴側の水はまだ十分あることが確認でき、かつ、中操の表示ランプの点灯が弱々しくなってきたためこのタイミングを逃すと二度と開けられないと考え、21:30に再びI Cの開操作を行った。
- この弁操作について、[REDACTED]蒸気発生している等の不確定情報は得ていたとの認識があったが、水位計の誤表示(T A Fよりも上に水位があると表示)もあり、緊対本部では津波襲来後I Cは動作を継続していると誤認していた。

- 18:18の開操作以前には、I Cについて特段操作を行っていないが、[REDACTED]津波直後の数時間はプラント全体の状況把握に取り組むのが精一杯で、I Cに集中して対応できる状況ではなかったことを理由としてあげている。また、①直流電源がないと中操では開操作ができないこと、②現場で格納容器外の弁を手動で開けることは可能であったが、格納容器内の弁が閉まっている可能性があったことも背景にあったとのこと。
- 1号機の原子炉水位計の表示については、後日、誤表示していたことが判明したが、当時は原子炉の状態が確認できるパラメータが水位計しかなかったため、しばらく水位計の値が変化しないなど信頼性を疑う所員もいたが、誤表示という判断まではなされなかったようである。
- 11日夜に原子炉建屋内で線量が上昇したが、原因はMSトンネル室(原子炉建屋内にあるタービン建屋側の部屋)にある配管からの蒸気リークか格納容器の線量そのものが上がっているかのどちらかであり[REDACTED]
[REDACTED]この線量上昇により何らかの燃料異常が発生していると判断していた。[REDACTED]
[REDACTED]11日夕方に建屋に入った運転員がAPDの警報が鳴ったことで引き返したとのことであり、夕方から線量が高くなり始めていた可能性あり)

④ベント

- ベントについて、現行のアクシデントマネジメントでは電源のあることが前提であり、ベント弁の開操作は全て中操で可能(このため、ベント訓練は最も簡単な訓練の1つとのこと)。しかしながら、今回の事故では電源が喪失しており、ベント弁を開くには、現場に作業員が入り、手動でレバーを回す、バッテリーを接続し励磁させる、圧縮空気を送り込む、といった作業が必要であった。また、現場の作業環境も、暗闇やがれき